

## 被災文化財救援活動 (2)

### 陸前高田市立博物館所蔵 「拓本」掛軸安定化処置作業への支援協力

岩手県陸前高田市立博物館は、2011年3月11日に発生した地震と津波により、1名を残して職員全員が亡くなるという悲劇に見舞われました。

JCPでは、昨年6月から、救援委員会（東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会）の要請を受け、東京国立博物館保存修復課の指導監督の下、救援された所蔵品の調査に当たるなど、支援を続けています。（ニュースレターNo.24『岩手県陸前高田市立博物館被災資料救援活動 参加報告』参照）。

被災資料の中でも、昭和53年度の館長 宗宮参次郎氏が、県内の石碑の拓本を取って自ら表装した400件以上の軸装等資料は、オリジナルの石碑が流されてしまった今、非常に貴重なものとなっています。岩手県教育委員会では、これら軸装の塩分除去と安定化処置を図るべく、水沢市内にある奥州埋蔵文化財調査センターに運び、12月から東京国立博物館保存修復課とJCPの会員ボランティアが協働して処置に当たることになりました。

掛け軸の多くは紙表装であり、津波被害により塩害とカビによる害を被っています。当初は掛軸の履歴を語るものとして表装ごと保存することも提案されましたが、限られた時間の中で本紙の救命を優先するため、本紙を表装から外すという決断が下されました。この結果、JCPには十分な経験と技術を持った技術者が求められました。そこで、4年以上の経験をもつという条件で有償ボランティアとしての技術者を募集したところ、12名に上る技術者がエントリーしてくれました。

JCPでは、3クール（1クール2週間）にわたって平均5名/1日の技術者を、作業場所となった奥州埋蔵文化財調査センターに派遣しました。東京国立博物館保存修復課アソシエイトフェローの指導の下、自然と役割分担がなされ、長期間にも関わらず良好なチームワークが保たれたのは、メンバーの高い協調性に依るところが大きかったと思います。作業は予想以上のペースで進み、3クール終了時にはほぼ90%の安定化処置が完了しています。

今回は、拓本安定化処置作業に従事して頂いた会員の中から、2名の技術者にご寄稿頂きました。



陸前高田市立博物館所蔵「拓本」掛軸安定化処置作業を行うJCPメンバー（左から日野さん、脇屋さん、佐藤さん、吉原さん）と東京国立博物館の鈴木さん（右端）

#### 「岩手レスキューに参加して」

吉原光洋（NPO JCP登録会員）

昨年の12月、今年の1月2月と各2週間づつ、3期に分けて行われた、被災した文化財のレスキュー作業に参加した感想を記したいと思います。

私自身にとっても、忘れられない出来事となりました。



作業を行う吉原光洋さん

このプロジェクトは、国が行っている東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会（通称；レスキュー委員会事務局：東京文化財研究所内）の要請を受けて、東京国立博物館保存修復課とNPO法人文化財保存支援機構の協力で行われました。

そこで昨年12月にJCPのメールマガジンでボランティア募集の広報が掲載され、応募したところ、私にも声がかかりました。

当時の現場状況は、陸前高田市立博物館に隣接した「海と貝のミュージアム」が壊滅状態で、10万点の標本、15万点の作品を全て失うというものでした。

陸前高田市では、人口の10%に当たる23,000人が亡くなったということです。

今回の作業の目的は、救援された掛け軸をとりあえず長期保存出来る状態にまで持っていくことでした（長期安定化処理）。

海水や汚泥に晒された作品の洗浄です。これに関しては、基本的には所蔵者側の考えが優先されるべきものでしょう。専門家も交え様々な意見が交わされた結果、11月秋に「本紙を守る」考えが決定されたと聞いています。

作業内容については、通常をはるかに超える損傷した作品たちがいくつもの段ボール箱の中にぎっしりと詰まっていた。当初、三百数十点と聞いていた作品は、最終的には五百点に近い数になりました。

今回お会い出来なかった方もおられますが、簡単にメンバー紹介をしたいと思います。

メンバーの年齢層は、20代から60代まで幅広い層が集結しました。

- ・アイデアが湧き水のごとく次々と出てくる60代のS氏。
- ・自衛隊経験者で特殊訓練で200名以上の中で最後の8名に残ったW氏
- ・イタリアのトスカーナ州公認修復士の免許を持つH氏
- ・東博からは、紙本修復師のH女史、N女史、韓国国籍を